

ア
ト
ハ
ト

椎名誠

ノドバード

椎名誠

集英社



アド・バード

一九九〇年三月二十五日 第一刷発行
一九九〇年四月二日 第二刷発行

著者 椎名 誠 しいな まこと

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区・ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇〇一五〇

編集部 (〇三) 二三〇一六二〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛てにお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1990 MAKOTO SHIINA

Printed in Japan ISBN4-08-772736-X C0093

アド・バード
◆ 目次

第1章 出 発

1 腐敗都市 8

2 高架道路 21

3 ズル 35

4 再生 48

5 地ばしり 61

第2章 暗 闘

1 戦闘樹 76

2 おたすけボーイ 87

3 沸騰 101

第3章 潜 入

1 うねり 110

2 羽化 123

3 降下 136

4	トンネル	149
5	夜空	162

第4章 思考

1	蚊喰い虫	178
2	「海視人」	190

第5章 混沌

1	街	198
2	らせん階段	211
3	けつでっか	224

第6章 迷路

1	黄色い光	240
2	贖罪	254
3	栈橋	267

4 覚醒 280

第7章 奔流

1 塔 294

2 閃光 307

3 転落 320

4 邂逅 335

第8章 飛翔

1 黄金岬 350

2 崖の穴 363

3 巨鳥 376

あとがき 392

アド・バード

第1章 出 発

1 腐敗都市

安東マサルはずっと武器の事について考えをめぐらせていた。どんな武器を持っていっただらいいだろうか、という事と、どんな武器が手に入るだろうか、という二点だった。

マサル自身はアイクチとねご銃を一丁ずつ持っていた。アイクチはもう相当の年代ものらしく、研ぎすぎで刃の先端部分が槍の穂先のようにいささか頼りなげに先細りになっていた。マサルはしかしその方が実際に敵の眼前で白刃をひるがえしたとき、真新しいナイフなどよりははるかに心理的に威圧感を与えるのではないか、と考えていた。

そのアイクチはマサルがまだ十五、六歳の頃「個人大型住宅殲滅隊」のあとにくっついていて、瓦礫の中から見つけてきたものだ。瓦礫荒らしが見つかる、子供でも指巻きや腸出しといった重刑があったので、

マサルは必死に逃げ帰り、それを家の板壁の間に放り込んだ。時代が激しく変っていくのをじっと待って、二十歳をすこしすぎた時に漸く取り出したのだが、そいつは抜き身のまま放り込まれていたのにまったく錆がついていなかった。マサルは古代剣の悲しいほどに清冽な誇りと強靱な力をそこで初めて目のあたりにし、感動した。

抜き身の刃に鞘をつくるために、それから一週間近くかけて街の中を歩き回り、手ごろな木を捜し歩いた。街の中央を流れる横編川沿いの人工土手には貧弱だがまだ何十本もハコヤナギの木が生えており、河口近くの埋立海岸にはずっと昔の防風林のなごりのクヌギやタブノキといった広葉樹の瘦せた古木が残っていた。しかしこうした樹のたとえ朽ちかけた小枝一本でも、切ったり折ったりしたら「市街地樹々草木保護美化連盟」監視人による悲鳴型拡声器のけたたましいわめき声とともにたちまちのうちに追いつめられ捕縛されてしまうのだ。こうした各種の自然保護団体に捕まると恐ろしかった。立木の枝折りなどの比較的軽いケースでも、まず最低六週間の禁固強制映像教育や睡眠学習

をほどこされた。「緑は地球を救う」「かけがえのない炭酸同化作用」「樹木の知覚とその発達」「精鋭樹を求めて」「人工林」「保存処理をされた柱と杭の叫び」「どんぐりと山猫」「針葉樹さんの苦痛とそのシグナル」「共盲主義と革命的森林伐採」などという啓蒙フィルムを一日に十―十五本ほどたて続けに見せられ、毎日感想文と反省文と未来感情提案という三種のレポートを書かせられた。そのため大抵の人間は六週間たつて釈放されると同時に過激な自然保護主義者となっていた。

安東マサルは最初から街の中の立木は狙わず、むしろ街中の荒廃した美術館や記念館を物色した。これらの巨大な石の家の中には堅木で造られた彫像や置物がまだいくつか瓦礫の中に放置されている、ということに目をつけていたのだ。

そこでマサルは「福原万造翁杖つき疾走記念公園」の中にある「欲目美術館」に侵入した。糞尿と小動物の腐臭がする薄闇の中で、侵入一時間後に横倒しになった騎馬武者像を見つけた。そして倒れた武者の腰のあたりから悲劇的に突き出ている長刀の鞘の部分がま

ったく破損されずに残っているのがわかった時、マサルは薄闇の中で一人で数分間笑った。

鞘は突き出ている部分だけで七十センチほどもあったが、帰りに隠して持つていく安全を考え、とりあえず必要な二十五センチほどの長さを折り畳み式の鋸で切断した。木は古く乾燥しきっているのでおそろしく堅く、鋸の引き刃に相当の力が入った。

三十分ほどかけて切断したあと、マサルがまっ先に見たのはその切断面の中央だった。もしかすると、そこに刀身の通る縦長の穴があいているのではないか、と思ったからである。しかし断面はきわめて不機嫌に平らのままであった。

「そりゃあそうだよな、すまんすまん」と、安東マサルは独り言をいい、それからヒヤッヒヤッヒヤッと大があえぐ時のような音をたててまた数分間、一人でしつこく笑った。

獲物を服の下ベルトに挟み、マサルは落着いた足どりで福原万造翁杖つき疾走記念公園の長い中央路を歩いた。中央路を歩くとそれだけ人に見られる、という危険はあったが、しかし汚染度六七％未満のB級生

熊破壊地区を歩く時は最低レベルの防禦措置として舗装された通路を歩くこと、という「被災時の身の守り方その⑬」というのをマサルは冷静に守っていた。このあたりは数年前にヒゾムシにまともに襲われた一帯で、立木も草も見わたす限り緑のものはみんな枯れていた。

マサルは子供の頃一度街の中でヒゾムシに寄生されてほとんど死にかけている人間を見たことがあった。中年の男で、そいつは異様に脹らんだまぶたの奥の、膿のような赤黄色になった目でぼんやり外の空気を見つめていた。ふくらんだ腹の上に組み合わされ、ぶるぶるふるえている指の先がいずれもヤモリの吸盤のように広がり、それはひとつずつばんばんに脹らんでいた。いかにもそこに出口を失なった大量のヒゾムシが留まっているように見えた。

男はコンクリートに鉄のブラシでもこすりつけるような声でしきりに何か言っていた。母は「ちがう」と言っていたが、マサルには「ユビを切ってくれ、ユビを切ってくれ」と言っているように聞こえた。丸く脹らみ切った指の先を一本一本ナイフで切っていくと、

本当にそこからヒゾムシがビュッと音をたててはじき出てくるような気がしたが、はたして実際にそのようなことになったのかは、子供の自分にはよくわからないことだった。

ヒゾムシは線虫の一種で、その大きさは長さ〇・八ミリ、幅〇・五ミリぐらいの、漸く肉眼で見えるぐらいのムシだったが、このあたり一帯に異常繁殖した時は土壌を食いつくし、地表にかたまりあって姿をあらわしてきたという話をよく聞いた。数千万匹ずつの黒い毛玉の塊のようになったそれは思いがけないほどの早さで収縮を繰り返しながら、ざわざわしゆるしゆると音を立てて地表を動き回っていたのだ。

マサルは公園の出口までの長いコンクリート舗装の道を歩きながら、両脇に続く焦土のようなもとの緑地帯を眺めた。人とか小動物の動く姿は見えなかったが、そのあたりからすこしでも視線をそらせると、黒い土があちこちでいきなりうると盛りあがってくるような気がした。

マサルが切り取ってきた木彫の鞆は、マサルのアイクチの鞆にするには長さも幅もすこし大きすぎた。そ

こでまず全体を縦に二つに切り裂き、アイクチの刃が収まる部分だけ内側を削り取り、それから全体をそっくり小さく切つて縮めていく、という結構手のかかる作業が必要だった。

安東マサルは冬の間ほとんど自分の寝場所に籠つて楽しみながらその作業を続けた。

夜になると三日に一度のペースで地下二階にある「ハッピー・デイズ」の倉庫に行き、とりあえず二三日必要な食品をアタック・ザックの中につめて運んできた。ハッピー・デイズはまだ街の中心部では日中だけ営業しているデイリー・フーズの店で、そこでは食料品のほかに簡単な日用雑貨も販売していた。その倉庫への個人的な定期訪問は安東マサルにとって最大の秘密だった。ルートは簡単に緊急時の排煙ダクトを通つていく、というだけのことだったが、内径五十センチの垂直と水平の円管の中を自由に動いていける能力がないと本質的にはなんとも手に負えないルートでもあった。

安東マサルは十二歳の時から始めていたフリークライミングの技術を生かして、この排煙ダクトの上、

下方向へのそれぞれの探索をすすめ、ある日地下二階で偶然この宝庫を発見した、という訳だった。

アルミダイキャスト製の円管の内側は足がかりのまったくないすべすべの単純なパイプ、というだけで、こういう所を登るチームの登攀技術を駆使しても長時間は難しかった。

マサルはそこでアルミダイキャストに適応するガス圧式接着機を半年ほどかけて強引に造りあげた。問題は僅かとはいえ確実に内側に歪曲している円形パイプの表面に百分の効率で密接する吸着体だった。

最終的にはフラットソラールという大昔の横這いレーシングカーのタイヤなどに使われる驚くべき自動粘着力のある石油化合物を見つけたし、それで確実にしかも素早くアルミダイキャストの垂直の壁を動き回れるようになった。マサルはセルフビレイのためのザイルと長いガスホースを引きずりながら、この二台の真空機を、交互に「作動」し、そして「解除」し、ゆっくり着実にパイプの中を動き回った。

「おれは蜘蛛男になった。なんでもやろうと思えばできるのだ」

安東マサルはパイプの中をゆっくり上下しながら、
そうやって独りごち、ヒヤッヒヤッヒヤッとまたひく
い声で笑った。

部屋が暗くなっていた。

机の上に並んでいるまだ中身の入っている缶詰や真
空パックの袋を眺めながら、安東マサルはずっと武器
の事を考え続けていた。

一日中殆ど動かず、考えごとばかりしていたので、
昼食を抜かしていたのにもかかわらずあまり空腹感
はなかった。

テーブルの上には牛肉をトマトや玉葱などと赤ワイ
ンで煮つめたデミグラスソースと、ブルーベリーのシ
ロップ漬、それに大豆から作った白ソーセージなど
のおそろしく豪華な大皿が並んでいた。

どれもずっと昔ハッピー・デイズの倉庫から盗ん
できたものだが、あまりにも希少な高価高級ものなので、
もう何度も手をつけずにただ時おり眺めているだけに
しているものだった。

「ねご銃だけではどうしようもない。たとえば小口径で

もフンボルト式の薬爆銃か反動式散弾銃を手に入れな
ければ……」

というのが結局その日の思考の、朝から決まってい
た個人的結論だった。

「ブルブワズエキス熱水抽出液・万全」と大きな文字
で書かれている健康清涼飲料水のプルリングを乱暴に
引き上げ、その苦い液体を顔をしかめて飲んだ。これ
を毎日一缶ずつ飲んでいればまだ大量に残っている異
常発生 of 悪性微生物や線虫類の体内侵入を防禦できる、
というのが効能だった。

ふいに電話が鳴り、驚いてマサルは口に含んだまま
すんなり飲みきれずにいた最後のひと口分の液体を思
わず吐き出してしまった。ベッドの上の毛布が濡れ、
黒っぽいシミがゆっくり広がっていったが、それはま
あどうでもよかった。

ちよくちよく回路閉鎖されている電話は、最近はず
っと故障気味で、今週末すでに三日間ほとんど通だ
から、もう殆ど使えないものと諦めていたのだ。だ
から突然のベルの音は、壊れていた眼覚まし時計がい
きなり動きだしてベルを鳴らしたような驚きだった。

「あにきか？」

と、送受話器のむこう側で鼻風邪をひいたような声がフライパンの上のハネトビーズのように、電話のもう相当におかしくなっている変声回路のむこうでとびはねていた。

「きちふんきちふんきちふん」というひしゃげてなんだか奇妙にいらだたしい音が、そいつの背後でひくく重く聞こえていた。木製歯車の回転音のようなかんじだった。

「おい、あにきだろ。早くこたえろよ」と電話の声は言い、その声を追うように、きちふんきちふんきちふんという、あっちこっち空気の漏れたような音が聞こえた。

「ああ……」

マサルが警戒気味に喉のあたりでこたえた。

「よかった。つながった。きちふんきちふんきちふん」

電話は弟の菊丸からだった。

「どうしたんだ？」

「どうしたはないだろう。ずっと心配してたんだ。お

まわりがしきりに嗅ぎ回っていたし……」

「何を？」

「おいどうしたんだ。本当に兄貴か。きちふんきちふんきちふん。兄貴の安東マサルか？」

「いいかげんにしろよ」

「声はたしかに本物だ……。きちふんきちふん」

「酔ってるんだな？」

「くくくっ」

と、菊丸はわらった。

「あさってまでに、フンボルト銃が一丁、手に入りそうなんだよ。タマつきでな。そういうことを、いま決めてきたところなんだぞ。きちふんきちふんきちふん」

「おい。本当か！」

「嘘を言ったってしょうがないだろ。こんなところ……」

菊丸が喋っているむこうで、もうすこし別の、今度はなんだか長い鎖が素早く巻きとられていくような音がしていた。

「わかった。ただしかし、お前はいまどこにいるん

だ？」

「わかるだろう。うしろ側の音でさ。きちふんきちふん」

菊丸の声が変にシニカルな口調になっていた。

「よくわからないな……」

「薄情な男だな。おふくろの部品がまだ生きているところじゃないか。この音を聞いてわからないのか」

安東マサルは送受話器を握りしめたまま背中と腹のあたりに大量の汗をかきはじめているのを知った。弟の言ったたったひとつのヒントで、その場所というのがわかった。

「臓器保存墓地」だ。母から息子へ、息子からその孫へ、あくまでも親族だけ。わたしの大切な網膜と、まだ充分に働けるふたつのこのわが家系のタフな腎臓も脾臓も、あたしゃそれ以外の他人になど誰にもあげやしないわよ……。

おそろしく金がかかったが、それでも時おり死体をそっくり保存しておきたい、と考える人々がいた。彼らのうちの何割かはその死体保存箱の中に、こっそり

剣や銃を死者のためにしのばせてやった。臓器あらしや、管理ミスによる腐蝕崩壊などの恐怖を、古めかしい銃剣の加護で防ごうとする、それは殆ど「おまじない」に等しい行為だったが、墓地の管理人達はそれらを黙って受け容れていた。

そして時おり、この臓器保存墓地の管理人筋から銃や剣の密売ルートが生まれるのだった。

弟の菊丸が手に入れようとしているフンボルト銃がその種のものであるらしい、という事をマサルはすぐ理解した。

どんなところからのものでもいい、とにかく出発までに銃が手に入ればそれでいいのだ、とマサルはさつきよりもさらに暗くなってきた狭い部屋の中で考えていた。

また電話のベルが鳴った。前ほどではなかったけれど、再び自分でわかる程全身がざくりと動いた。狭い部屋の割に電話機の音が大きすぎるのだ。同時に、じぶんは今、特に普段よりもナーバスになっているのだ、と思った。

「マサル？」